

民話のうき



民話 ゆうき



発刊にあたって

結城市教育委員会教育長 田沼進

わたくしたちの住んでいる街や村、地域には、その時、その時の人々の口から口へ、伝えられてきた、おもしろい話、かわいそうな話、ふしぎな話を、たくさんあります。

そして、このようなお話は、その時、その時の人々の、くらしのなかから、また、考えのなかから生まれてきたものです。

わたくしたちは、それらの話を聞いたり読んだりすることで、むかしの人々、わたくしたちの祖先を身近かに感じ、わたくしたちの住んでいる街や村に、いつそう親しみを感じることができると思います。

また、それらの話を聞いたり、読んだりしているうちに、知らず知らず、わたくしたちの心が、きれいになり、美しくなり、ゆたかになるのではないかと思います。

そんな考えから、みなさんのおうちのかた、とくに、おとしよりのかたのお力添えをいただいで、集めたお話をまとめたのが、この本民話『ゆうき』です。

市内の先生がたも、この本を読みやすくするために、何回も文章をなおしたり、使う漢字をどうするかなど、調べながら、昭和四十九年から四年がかりで、まとめました。

この本に載せたお話のほかにもすぐれたお話が、まだまだあるのではないかと思います。この本には、結城市内に伝わっている四十の話だけ載せるにとどめました。

この本を、ひとりで読んで、また、みんなで読み合っ、前に書きましたように、『むかしの人々、わたくしたちの祖先を身近かに感じ、わたくしたちの住んでいる街や村にいつそう親しみを感じ』『わたくしたちの街や村をかわいがる』心、また、『きれいな、美しい、ゆたかな』心を、育てていただきたいと思ひます。



田 ぼ の 月

むかしのことでした。

結城の町から少しはなれた小埜という村に更助という若い百姓が住んでいました。

更助はとてもはたらきもので、一日中よくはたらきました。そうして夕方になると、畑でとれた野菜を町へ売りに出かけました。

ある日のこと、いつものように更助はさともをたんと売ったお金をふところに入れ、夜の道を帰ってきました。ゆるやかな丘をおりると一本杉の立つ大日堂がありました。もう小埜の村はすぐそこです。まんまるい月の光でたんぼの稲はこがねのように美しくなびいていました。

更助はふとだれかの泣き声をきいたような気がしました。風の音かなと思いましたが、そうではありませんでした。よく見ると、大日堂の小さなほこらの近くで、一人の女の人が泣いて

一	田んぼの月	一
二	狐の嫁入り	五
三	ねこづか	七
四	むじな聖教	九
五	一つ木どん	一二
六	化け地蔵	一五
七	じんべい星	一八
八	障子淡絵	二一
九	立木地蔵尊	二三
一〇	いだらぼうの足跡	二五
一一	和歌の前	二八
一二	空を走る人魂	三〇
一三	小豆を洗う老婆	三三
一四	夢の財宝	三五
一五	きつねと平助	三七
一六	足跡(あしつこ)の話	四〇
一七	長者が池	四二
一八	お産山	四四
一九	繁昌塚という名の起こり	四七
二〇	ゴリョウ山	四九

二一	曾我殿台	五一
二二	わらでっぼうをうちながらうたう歌	五三
二三	てまりうた	五五
二四	十五夜	五七
二五	消えたたくわえ	五九
二六	上山川「我里内」部落の名のおこり	六三
二七	若御前	六五
二八	「曾雌」の話	六七
二九	長者の跡の芋畑	六九
三〇	ほら穴様	七一
三一	旧結城寺の由来	七三
三二	鐘が淵	七六
三三	首切り地蔵	七九
三四	七つ石	八四
三五	袖切り橋	九三
三六	将門とその妻	一〇一
三七	源翁和尚と九尾の狐	一〇五
三八	不動明王	一一五
三九	名誉市民斎藤茂一郎	一四九
四〇	ブローリーの星	一五三

も く じ

いました。

「どうしたんだ？こんなところでああ。」

更助はおどろいてその人に近づいてみると、このあたりでは見かけたこともない若く美しい女の人が、すすり泣いているのでした。更助がわけをたずねると、

「わたくしは鬼怒川の向こうの伊讚いざというところから来たものです。母が病気で死にそうなので、結城の四ツ京に住んでいるという医者をつよつてきました。しかし、持ちあわせのお金がたりなくて、医者は来てくれません。どうかあなたさまのお金をかしてください。」

その人は更助のお金ぶくろを見て熱心にたのみこみました。

「そうか。」

更助はかわいいそうに思いました。もともと欲のないしんせつもの更助のことですから、そのようなかわいそうな人を見れば、すぐ助けてあげたい気持ちになるのです。

しかし、よくその女の人を見ると、なんと、きものすその方から、たぬきのしつぽがのぞいているではありませんか。

「ははん、これは狸だな。」

と思いつつも、更助はその狸をおこる気持ちにはなれませんでした。こんなにしんけんにならざるのをみると、母親の病気はきつとほんとうなのもかもしれないと思いました。

「よし、狸にだまされたふりをして、このお金をくれてやるう。」

更助はこう思うと、金ぶくろを思いきつてあげてしまいました。

「金はいささなくてもよいから、かあさまをだいにじにしてやつてくれや。」

更助は帰るときにこういつて、のらじばんのふところに手をつこんで歩きだしました。

更助が行つてしまうと、狸はしよんぼりとなつてしまいました。いつもは人をだましてよるこんでいたあのゆかいな気持ちとはちがつて、きょうはなにかかたしい気持ちがこみあげてくるのを感じました。

「更助はしよんぼりな人だ。」

「更助はあつたかい人だ。」

と狸は思いました。それにくらべてわたしはと狸は考えてしまいました。

その夜のことでした。更助の家の雨戸をだれかがたたくのです。トントン、ササー、トントン、ザザー、更助はその音で目をさまし、雨戸をあけてみると、のきばのむしろの上に狸にあげたはずのお金が袋のままそつくりのついでにはありませんか。

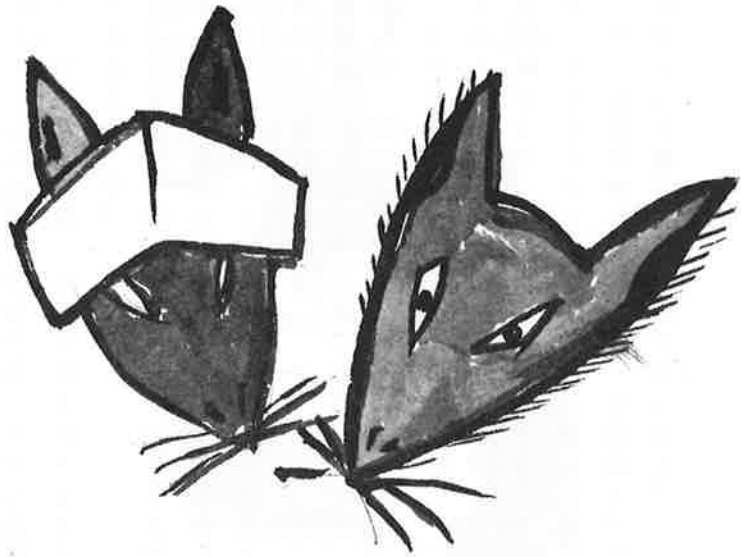
「狸のやつ、金がなくて困るだろうにー。持つていけや、おらあよく知ってるんだから。」

と庭に向かつて声をかけましたが、狸の姿はその辺にはありませんでした。ただ月の光だけが更助の家や田んぼの稲をこりこりと照らしておりました。

次の日も更助は町へ出かけていき、そして月夜の道をもどつてきました。すると、ふと東の空からもうひとつの月のぼつてくるではありませんか。更助は思わず「おう」と空をふりあげました。中空に輝く月は、白々と遠くの森の方まで照らしていました。赤い大きな月は、稲田の上すれすれに浮んでおりました。まるで中空の月と田んぼの月がたがいに呼びかわしているように、二つの月は生きもののように浮いておりました。

しかし、赤い月はいつまでも浮いてはいませんでした。更助がおどろいてながめている間に、

月は大日堂の一本杉の根もとあたりに落ちていきました。
 次の日はおてんとうさまがキラキラと照って、よい日よりでした。更助はひとり、のこぎりがまをこしにさして稲かりにでかけました。そして大日堂の一本杉のところ、更助は朝つゆにぬれてつめたくなつた若い狸のなきがらを見つけました。
 それから三日もたつたころ、川向この伊讚へ行つてきた村の人が、大きな狸が畑のはずれの木立ちのところ、息たえていたという話を聞いてきました。
 それいらい、大日堂あたりの田んぼ道を通りかかつた人たちは、よく月が二つ浮いているのを見ることができたそうです。そしていつか村の人たちは、あの月は狸の生まれかわりにちがいないと思うようになりました。



狐の嫁入り

むかし、むかしのお話です。といつても、今から六十年ほど前のお話です。

結城の健田神社が、いくつかに分かれていた頃のことです。今の上山川のあたり、田んぼの中に小さなお宮があり大きなけやきの木が一本のつそりと立っていました。

人々のうわさでは、夜その近くをとる人は、よく狐にだまされたと言っています。

ある晩のことです。風が少し出てきました。竹やぶがかすかにゆれています。その竹やぶとおして日もとつぷりとくれました。遠い田んぼの中、それは、ちょうど、あの大きな木のあたりでしょう。

それは、それはきれいなちやうちんが十も十一もぎょうぎよく並んでいるではありませんか。そして、そのちやうちんの列は、遠くまた遠く

狐の嫁入り

の田んぼのほうへ動いていきます。まるで、夢をみているようです。そのちようちは消えてはつき、ついでに消えているのです。そして、その場所には、たびたびきれいなちようちんのぎようれつがみられたそうです。

きようもまた、田んぼの中にひっそりとお宮が建っています。お宮のまわりで遊んでいる子どもたちの元気な声がかかります。のっそりと立っているけやきの先にはカラスが一羽カア、カアとなっています。

村人がいうには、田んぼのぎようれつは、

「あれが、狐の嫁入りだ。」

というのです。

そのちようちんの点滅（ついたり消えたりすること）は狐の呼吸だとか：。

その狐たちが、どんなかっこうで歩いてきたのか。その頃の老人たちがよく子どもたちに話してくれたものでした。いろいろ豊かなんを羽織って（着て）気取った歩き方をする老いたきつねを先頭に、着かざった花嫁ぎつねをたくさんのきつねがはやしなから守りつゝ田んぼのずいっと遠くまで続いていったと。



ねこづか



ねこづか

山川の新宿に べんてん様がある。そのわきに、むかし小高いつかがあった。これは、ねこづかと いわれていた。

さて、ずっとむかしのこと、山川のおふどう様で行なう おそうしきが あった。

前日に、おかんに入った 死人を まつておくとき、夜中に トントンと 戸をたたくような 音の音がする。

おしよさんが、目をさますと、
「おしよさん、今夜のさかなは、何だんべ。」
という声がする。

「今夜は、女だよ。」
と、おしよさんは、ねほけまなこで 答えた。
おしよさんは、そのまま ずっと ねむってしまつた。

しばらくすると、何かぶきみな 物音がし出

した。

おしょうさんは、ねむ気もさめて、そばにおいてあった 刀をとり 物音のする方に そつと しのびよって行った。

すると、どうだろう。

真黒な ねこが、目をらんらんとかがやかせて おかんに 入っている 死人を くわえ出そうと しているでは ありませんか。

おしょうさんは、こしもぬけんばかり、びつくりしてしまった。

そして、黒ねこ めがけて 刀をなげつけた。

黒ねこは、ギャイといって すばやく 暗い くりの方へ へびて行ってしまった。そのあとには、黒ねこの血とつめが、あたり一めんにちつていたという。

おしょうさんは、このねこのつめをあつめ、ねこづかとしてまつたといわれる。



むじな聖教

弘経寺くわんけいじとよぶ寺は茨城には、鬼怒川沿いの結城や水海道飯沼、そして取手の三寺があります。

ところで水海道飯沼の弘経寺は、結城と同じく壇林だんりんといい、浄土宗じょうどしゅうの学問所であり、よその土地からもたくさんのおほうさんがこの寺に集まり、しゅぎょうをつんでいました。

二代めの住職良暁上人じゅうしやくらぎょうじょうにんのときのことです。多くのしゅぎょう僧の中のひとりに良全りょうぜんというすぐれたおほうさんがいました。しかし、この良全は、日ごろから、その行ないやようすがふつうの人でないことを良暁上人はうすうす知っていました。

ある夏の日のことでありました。その日、おほうさんたちは、寺のけいだいで、すもう大会をしました。そのとき、良全は人なみ以上の力をだして大かつやくしたのでした。そして、す

もう大会が終わると良全は疲れがどつと出てしまい、ひとりへやへもどると、高いびきをかいて寝こんでしまいました。良晚上人はこの高いいびきに驚いてそのへやにはいつてみますと、良全の姿はなく、へやの中ほどに一びきのむじながねむっておりました。日ごろから良全のことをおかしくおもっていた上人は、その正体を見てたいへん怒り、人さまをだましていたことを問いつめました。すると、むじなは、

「なが年、裏山うらまにすんでいました。朝夕、おぼろさんのと見えるお経をきいているうちに、お経を習いたくなり、きょうまでおぼろさんに姿をかえておりました。」

と白状しました。そして、

「わたしが修業によつて得た秘術、来迎らいごう三尊さんぞん仏の姿をお見せしましょう。」

というと同時に、大きな音がして、あたり一面に紫の雲が流れわたりました。そのあまりの美しさに心をうばわれて、われを忘れていた上人をはじめ、多くのおぼろさんたちは、みな、いつせいに、

「なみあむだぶつ」

をとなえはじめました。ところが、ふたたび大きな音がしたので、上人は気がついて、あたりを見まわすと、すぐ足もとにむじなが死んでおりました。上人はむじなをかわいそうに思い、手あつくほりむつてあげました。そして、上人は自分のへやにもどつたのですが、そのへやにありがたい経文きょうもんが一巻おかれてありました。この経文は代々飯沼の弘経寺に保存されておりましたが、九代め住職の存ぞん把上人は当地が戦場と化すところから、寺のものを、鬼怒川をのぼり中島（現在の小山市中島）に戦乱をさけるために移したということです。

このとき、結城家のたのみを受けて、存把上人は今のところに結城弘経寺を開山しました。そのとき持ち運んだものの中に「むじな聖教」があり、今も結城弘経寺に伝っております。むじなの霊はその後けいだいに権現として祭られました。なおこの経文は飯沼の住職以外の人が見ると目がつぶれてしまふといわれているそうです。



一ッ木どん

むかし、東茂呂に一ッ木どんとよばれる、たいへん力もちの男がいました。

ある日のこと、用水のふちが草でおおわれていたのできれいにしたいと思いました。一ッ木どんは金物屋に行つて、

「大きなかまを作つてほしい。」

といました。金物屋の主人が、

「どのくらいのかまですか。」

と聞くと、一ッ木どんは、

「目方めかたにすると一貫匁かんめぐらい（三・七五キロ）のかまを作つてください。」

といつて注文ちゆうもんしました。主人はおどろいて、

「そんなに大きなかまをどうするのですか。せつかく作つても使えないでしょう。」

といつて相手にしませんでした。しかし、一ッ木どんは、

「どうしてもほしいのです。使うのです。」

といつて熱心ねっしんに主人にたのんだので、

「このかまを使うことができたなら、お金はいりませんよ。」

といつて、しょうちしてくれました。

一週間ばかりすると、かまができあがつたので、一ッ木どんはよろこんでかまを受け取り帰り道さつそく用水の草をきれいにかつてしまいました。そして、かまを見ると金物の部分がすりへつて、ほとんどなくなっていました。

金物屋の主人に見せたところ、大へんおどろいて、

「よく使いましたね。もう一ちよう作つてあげましょう。」

といつて、代金もとらずに作つてくれました。

一ッ木どんは、うれしさのあまり、みんなに言いふらして歩きました。

「どうじゃ、われほどの力もちはおらんじやろ。」

じまんしていたある日、戸ぶくろのところでないでいる野良のらねこにえさをやるうとして、うつかりふんでしまいました。大男にふまれたからねこはひとたまりもありません。たちまち死んでしまいました。

一ッ木どんは、大男のわりに気はやさしいほうでしたから、泣いてねこにわびるのでした。ねこのなきがらを三さろのところまで運び、かたわらにほうむつてやり、とむらいました。

一ッ木どんは、そのことがあつてから、いつも背を小さくまるめて歩き、自分を責せめているようでした。いつしか元気もなくなり、力も、うしなつたかのように動かずに、家にひきこも



弘経寺くわいけいじのけいだいに一つの地藏尊ぢいざうがあります。これはいつのころからのものであるのか、はつきりしませんが、ふつうの地藏尊とはちがつて、身のたけは台座から三メートルあまりもある大きなものです。そのうえ、顔もいかめしく、けわしい表情をしています。むかし、この弘経寺の近くに酒屋ととうふ屋がありました。ある夜のことでした。ゆうがたになつて降りだした雨は、夜ふけになると激しくなり、あらあらしく雨戸をうちました。

化ばけ地ぢ蔵ざう

ちようどそんなときでした。とうふ屋の店の戸をたたくものがあります。「こんばんわ。こんばんわ。」あまり夜がおそいので店の小僧はふしんに思いながら戸をあけてみました。すると、みのを着、かさをかぶつたみすぼらしい一人の男が立っていました。「とうふを一丁売ってください。こんなに

つてしまいました。そんなある日、ひとりの子どもがあわてて家にとびこんできました。「一ッ木どん、助けてくれー。おば、おば、おばあさんが木の下のじきに：：。」よく聞いてみると、村はずれにある杉の大木がたおれて、おばあさんが下じきになつてしまつたといひのです。これを聞いた一ッ木どんは、ふしぎに力がわいてくるのをおぼえました。「よし、やってみよう。」一刻をあらそう時です。一ッ木どんは言うが早いか表へとび出していきました。黒山の人だかりの中になつてはいり、かるがると大木をよせてしまいました。見ていた人たちは、

「みんなでかかつてもよせられなかつたのに。」
 「いつて、おどろきました。」
 ふたたび自信じしんをとりもどした一ッ木どんは、その強く大きなからだとやさしさで村中の人気者になり、しあわせにくらしました。

その後、この地を一ッ木とよぶようになったといひことです。

化け地蔵

「そのいれものにはとうふははいりません。」
とことわりましたが、あまりにも強くい
で、そのとつくりにとりふを入れたところ、
形もくずれずにはいつてしまいました。ま
ますふしぎに思った小僧は、その男のあとを
つけてみましたが、弘経寺のけいだいにある
地蔵尊のところで、姿を見うしなつてしま
いました。

あくる夜、ふしぎなことが、こんどは酒屋
でおこりました。夜ふけに一人の男が主人を
起こし、酒を買おうとしました。そして、そ
の男は一つのざるをさしだしました。主人は、
「ざるに酒ははいらないよ。」

とことわりましたが、あまり熱心にたのみこむので、ざるに酒をそそいだところ、なんと酒は
一てきもこぼれずにはいつてしまいました。ふしぎに思った主人が男のあとをつけたところ、
やはりあの地蔵尊のところで姿が見えなくなりました。

よく日じつになつて、酒屋の主人は、ゆうべの地蔵のあたりへ来てみると、その地蔵尊の口もと
に、とうふの食べかすがたくさんついていたという事です。

そこで、ゆうべの男も、とうふ屋に行つた男も、ともに地蔵の化身けしんにちがいないということ



化け地蔵

になり、この地蔵尊を化け地蔵と呼ぶようになったといふことです。



星 べい じん

東茂呂の通りを行くと、中ほどにあれはてた屋しきがありました。五反歩以上（五〇アール）もあるかと思われる屋しきにへいをめぐらしうつそうとした木が生えしげっていました。その昔は、たいへん栄えたとも思われる家の庭が、はがれた板べいの間からよく見えます。池のはたには、五重の塔、雪見どりうろ、春日どりうろなどがあり、美しい庭園のおもかげをとどめていました。家は入母屋づくりで尺三寸角の大黒柱をまん中に、ひとかかえもあるはりが大きく家をささえてがっちりしています。かべはおち、屋根に生えた草が一そうさびしく古さを思わせます。

ここに、じんべいは父親とふたりで住んでいました。昔は地主でしたから何の苦勞もなく大きくになりましたが、母親がなくなり、父親も病

気がちになると家計は苦しくなっていました。

働くことを知らないじんべいは、生活に困ると田畑を売ってその日の暮らしをたてていました。だが、残る田畑も少なくなりました。じんべいは、

（何とかして、自分の力で財産を取りもどさなければ……）と思いました。

わずかばかりの田畑をもとに、夢中で働きました。朝は暗いうちに起きて草をかり、ひりょうをつくりました。また、夜は月の光でいねをかるというように、朝早くから夜おそくまで、大の何倍も働きました。若い、じょうぶなからだにむちうって、よく働きましたが、ある時は水害に、ある時は日照りになやまされました。しかし、じんべいは村人たちとともに、はげまし合い、助け合いました。

べい 村の人々は、口々に、

ん 「じんべいさんは、働き者だ。」

じ といつて、ひょうばんになりました。じんべいは、ただ働くばかりでなく、人に対して親切でしたから、みんなにすかれました。困っている人にはお金をかしてあげたり、相談相手になつたりして、だれとでも明るくつきあいました。

じんべいは、からだのつづくかぎり、雨の日も風の日も休まず働きつづけました。そのかいあって田畑も取りもどし、生活もゆたかになってきたある日、田んぼの見まわりに行つて、ばつたりたおれてしまいました。こがね色にみのつたいねにかこまれて、息をひきとつたのでした。その顔は明るく、一生をつらぬきとおしたしあわせそのものの顔でした。

「あの働き者のじんべいさんが亡くなったか。」

「人のいいじんべいさんが亡くなったか。おいしいことをした。」
 村人たちは、じんべいの死を心からおしめました。
 それから数か月たったある日、おそくまで野良しごとをしていた村人が道にまよって帰れなくなってしまうと、こまっている、きゆうにあたりが明るくなり、道を照らしました。おどろいて空を見上げると、一つ光った大きな星があります。村人はまた、おどろきました。このひかりかがやく星は、ちょうどじんべいのえ顔のように見えるのです。
 「あれは、たしかにじんべいさんのえ顔だ。」
 「あれは、じんべいさんが星になったんだ。」
 と、さわぎました。じんべいが天にのぼって星になったのです。
 それからは、だれかが夜道にまよったびに星が道を教えてくれます。やさしいじんべいは天から村人たちを守り、村の発展をいのっているのかもしれない。村人は夕方になると、
 「じんべい星がでたから、帰んべや。」
 といつては、野良しごとをやめて帰るようになりました。



障子淡絵

かざり屋（櫛・かんざし・帯止めなどの小物
 を売ったり修理したりする人）の平助さんは、
 結城への道を急いでいました。道の両側には、
 白く枯れかかったすすきの穂が、おりからの風
 になびいています。下野の多功を、いつもより
 おそく発ったので、日の暮れぬうちに結城へ着
 きたかったのです。平助さんは立ち止まって、
 ずり落ちそうになる紺の大きな風呂敷包みを背
 負いなおしました。そして、肩にくい入る重み
 をこらえながら、またスタスタと歩きはじめま
 した。

あと一里も行けば結城城下に入ろうという所
 で、秋の日はつるべおとしに西の地平線に没し、
 いっしかあたりはまつくらに暮れてしまいました。
 た。あと半道ぐらいで、結城の町の灯もチラチ
 ラ見えてくるでしょう。平助さんは、「もう一

息だ。」と思いました。

ちょうど竹やぶの暗がりにはさしかかったときです。向こうから一つの火の玉がすーっと飛んできました。と見るや、竹やぶの中に障子がたち、火の玉は、あとからあとから飛んできては障子を開けて、中へ入って行きました。そして障子の内側にあるぼんぼりに火がともりました。障子の中では、花婿と花嫁がいま、三三九度の杯をかわし、結婚式の最中です。その様子が障子に影絵となつてぼんぼりと写つて見えます。たえなる楽の音も聞こえてきません。平助さんはその場に立ちつくし、しばらくうつとりとしてその光景に見とれていました。

どのくらい時間がたつたでしょう。ふと我にかえると、平助さんはやはり先刻の竹やぶの前に立っていたということでした。この道を通る村人たちも、いく度かこの光景をみたといい伝えています。

このお話は、結城市内の西はずれを南北に貫ぬく奥州街道沿いに古くから伝わるお話です。

立木地蔵尊

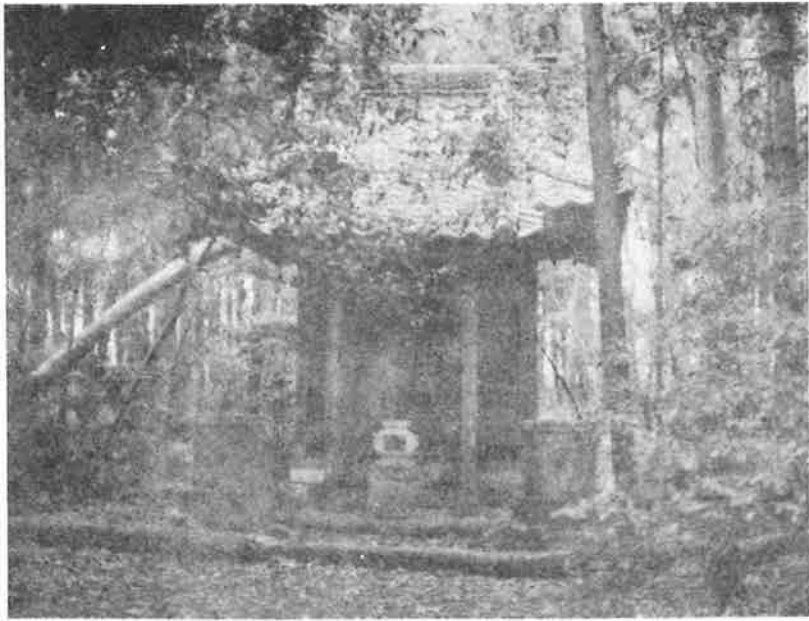
今からおよそ百五十年ぐらい前のことといわれている。

城の内地内に、土堤にかこまれた杉、椎、松などの雑木の南端に一つのお堂が建っている。部落の人はこれを立木地蔵と呼んだり、氏神様とも言っている。

この立木地蔵について、つぎのような話がい伝えられている。

当時、この立木地蔵一带は、昼なお暗いほど大木がおい繁り、なかでも山林の中ほどにひときわ目立った大木があり木の丈と言ひ、幹の太さと言ひ、まるで城主の象徴であるかのようになり、また村人にとつても、生活の目じるしであり、信仰のよりどころのようにもみうけられた。

ある日、この地を支配していた名主の栗橋氏



が、必要があつて、山林のシンボルである大木を切ることに成り、木挽や大工たちを集め木を切ることを命じた。

ところがどうしたことだろうか。木挽のひとりが、大木の根本をめぐけて、大斧をふりおろすと、たしかかな手ごたえはあつたが、ほんのわずかな切り傷があるだけで、さっぱり切れないのである。

何回も、何回も、斧をふりおろすが、さっぱりくいこまない、ふしぎに思い、切り口をみると、人間と同じような鮮血がたらたらと流れ出しているではないか。

木挽たちは、このありさまを見て、たいへんおどろき、道具を投げ出して逃げ帰り、このことを栗橋氏に告げました。

これを聞いた栗橋氏は、急いで現場に来てみると、木挽たちの言うとおりに、あたり一面鮮血でめまらされ、大木はまるで生きうらみを言っているようであつた。

そうして、木を切ることは中止となり、材木は、ほかの木を切つてかえることにした。

このふしぎな話は、近隣の人々の耳に伝わり、神様のたたりがでるのではないかとおそれられた。

名主の栗橋氏は、大木の霊をなくさめるため立木の地蔵をつくり、ねんごろにくようしたらしい。

今でも、堂の中にその立木地蔵は静かにまつられている。



だいだらぼうの足跡

むかし、常陸国に、だいだらぼうという大男が住んでいました。

だいだらぼうは、お百姓さんが狭い土地をいっしょうけんめいたがやしている姿を見て、「お百姓さんたちに、もつと広い土地を与えてやりたい。たくさん収穫をあげさせてやりたいなあ。」

と、ひとりつぶやいていました。

ある日、ふとすばらしい考えが浮びました。

それは、関東平野にそびえ立つ、常陸国の筑波山と下野国の大平山を、よその土地に移してしまふことです。そうすれば、もつと、田畑が広くなり、お百姓さん達も、たくさんお米や野菜などを作ることができるようになるからです。

お米や野菜などが、たくさん穫れば、お百姓さん達の生活も、もつと楽になるにちがいない。

りません。どんな方法で移動したらよいだろう。

だいだらぼうは、天をおおぎながら、考え続けました。

とつぜん、固く握った右手のこぶしを、左の手のひらにビシヤリと合わせました。

太い綱と大きな棒を使つて、筑波山と大平山をつるして、運んでしまおうと考えたのです。

そこで、だいだらぼうは、太い綱と大きな棒を用意しました。太い綱で、筑波山と大平山を固くしばりました。太い棒をてんびんにして、関取りが相撲を取るときのように、両足を開いて、腰を落し、

「エイッ。」

と、満身の力を含めて、天びん棒を持ちあげました。天びん棒は、弓のようにそりました。

ふたつの山は、意外に重く、なかなか持ちあがりません。汗が、全身ににじみ出ました。

両足は、地面の中に、ズブズブズブと、めりこんでしまいました。それでも、だいだらぼうは、力を抜きませんでした。

するとどうでしょう。一瞬、肩の力がスーッと抜け、天びん棒の一方が、天に向つて、はねあがりしました。

ドドドドドドドドという大きな地ひびきとともに、もうもうと土煙がまいあがり、岩や大木が飛び散りました。

力のはずみで、大平山がふたつに割れてしまったのです。

そのひとつは、空高くまいあがり、遠くに飛びはねました。これが、大平山の南の方に、さかずきをさかさにしたように立っている錦着山です。今、つつじの名所として知られています。

だいだらぼうは、がっかりしてしまいました。筑波山と大平山を運ぶことに、失敗してしまつたのです。気落ちしただいだらぼうは、筑波山の頂上に、ドシンと腰をおろしました。

だいだらぼうの重みで、筑波山の頂の中央がへこんでしまいました。そのために、筑波山頂は女体山と男体山のふたつの峰ができました。

だいだらぼうが、筑波山と大平山を運ぼうとして、力を入れたときにできた足跡は、その後、雨水や雪どけ水などがたまり、沼にかわつてしまいました。

この沼は、結城市先原の田んぼの中に、「だいだらぼうの足跡」と呼ばれて残っていました。しかし、近年おこなわれた農地改良のため、埋まつてしまいましたので、今では見る機会がなくなり、なくなつてしまいました。

和歌の前

和歌の前



この話は、今から約一〇四〇年ほど前の天慶
ころの話です。

今の結城市山川村粕礼部落に「和歌の前」を
まつた墓があります。

そのころの将門は、何ひとつこわいものな
いほどの力もち、自分かつてな、わがままな
ふるまいをしていました。

おじの国香のすんでいる上野（今の明野町）
をせめほろぼしたとき、村人たちが将門の乱ほ
うをふせぐため、ひとりの美しい女を献上しま
した。ところが、その美しい女には、前からふ
うふのやくそくをした男があつたのです。女は
あまりに、かなしいできごとになやんだあげく、
とうとう、部落を流れる矢の川のふちに身を投
げてしまいました。

これを聞いた男もまた女のあとをおつて、入

水してしまいました。

そのことがあつてから後、ふしぎなことに二人が身を投げた矢の川のふちに、夜ともなると、
青白いかすかな光を放つものが見られるようになりました。

村人たちは、若い二人の死をあわれみ、いつしかだれ言うもなく、この二人が龍となつて玉
を抱いてしずんでいるのだといううわさがながれました。やがてこの話が村じゅうにひろまり、
これに同情した村人たちは、その玉を拾い、手あつくまつり、近戸明神と名づけました。

ところが、その後、しばしば、大こうずいがおこり、村人たちはたいへんこまりました。

これは、近戸明神にある青い玉ではないかと思ひ、青い玉をもとの矢の川にもどすことにな
つた。そして村人たちは、位の高いおぼろさんをよんで、二人の霊を、黒ぬりの箱に納め、近
戸明神に納めた。

この黒ぬりの箱の中を見ると、目がつぶれるといつて開けた者はなく、その後、大こうずい
も、おきなかつたといわれています。

和歌の前

空を走る人魂ひとだま

七月の雨が降るある夜のことでした。まだ八つになつたばかりの良吉は近くのお屋敷まで使に行つた母親の帰りがおそいので、かさをさして、むかえにでかけました。

そのころの結城の町には、まだお屋敷といわれるほどの古い家なみが、そちこちに残つておりました。

とりわけ、昔、お城のあつたいまの本町あたりには、りつばなゆいしよ由緒のある家がありました。ですから土地の人は、本町をお屋敷と呼びならわしていました。

この高台のお屋敷から少し東へおりていくと、田んぼの中にそまつな家がありました。良吉はここに母と二人で住んでおりました。良吉が六つになつたころ、父親はやはり病いで亡なくなつてしまったので、母と二人だけのさびしい暮ら

空を走る人魂



しになつてしまつたのです。母は百姓しごとかたわら、人からたのまれた着物仕立てのしごとをしながら、ほそぼそと暮らしをたてていました。塙はなわだ台さまとよばれるお屋敷の門の前で、良吉は母を待つていましたが、なかなか出て来ませんでした。

雨はときどき激しく降り、またふつと休んだりしました。暗い通りはもうだれひとり歩くものもなく、道の両側からは大きな木がおおいかぶさるように道にせまつておりました。

良吉はもう待ちきれなくなつて、くぐり戸から中のようにすをのぞいてみました。すると、書院とよばれるへやのあたりから、障子をすかしてあかりがもれ、人々の泣きむせぶ声がきこえてくるのでした。

「どうしたのだらう。」

良吉はふしぎに思い、しばらくお屋敷の中をのぞいておりました。すると雨のやんだ書院の庭あたりから、きゆうに青白い光がゆらゆらと立つたかと思つと、すうつと長い火足をひきながらとびたちました。その光は、二、三メートルも光つて見ると、またふつと消え、また光りながらとんでいきました。

良吉はなぜか、いまままでに感じたこともないおそろしさを感じ、その場に立ちすくんでしまいました。

まもなく母親が門から出てきました。

「おや、来てたのかい？待たせたらうね。ここのおじようさまが亡なくなられてたいへんだつたのだよ。」

母親はそういういながら良吉の肩をだくようにして歩きました。

「いつ亡くなられたの？」
 「ついさつき息をひきとられたばかりだよ。」
 雨はすっかりあがって、暗い空に星さえ見えてきました。田んぼ道にくと、かえるの聲が天にひびくようにきこえてきました。
 それからというもの、人々は、だれかが亡くなるときになると、きまつて、あやしい光があたりを飛ぶのを見かけるようになったという事です。そして、だれが言うともなく「亡くなられた人の人魂が、からだをはなれていくのだ。」とうわさされるようになったという事です。また、この人魂は十才の頃までに見なければ、一生見ることはないとも言われています。



小豆を洗う老婆

ある雨の降る日のことです。組頭の六兵衛さんは聡敏神社へのお詣りの帰り道、結城城趾の入口近くの三叉路の所までやってきました。このあたりは竹やぶがおいしげり、うつそうとした暗がり続き、昼間でもさびしい感じのするところです。ところどころには大きな水たまりもできていました。

荷物のふろしき包みをにぎり直して道を左へまがろうとした時、だれかが呼んだような気配がしました。たちどまつて耳をすましてみますと、「ザアザアザア」という音がかすかにきこえてきます。「何だろう。」と思ひながら、二三歩茂みをかきわけてあたりをみまわしますと、「ザアザアザア」さきほどよりやゝ大きい音がきこえてきました。さらにかきわけて奥へはいっていききました。そこは一段低くなつていて、

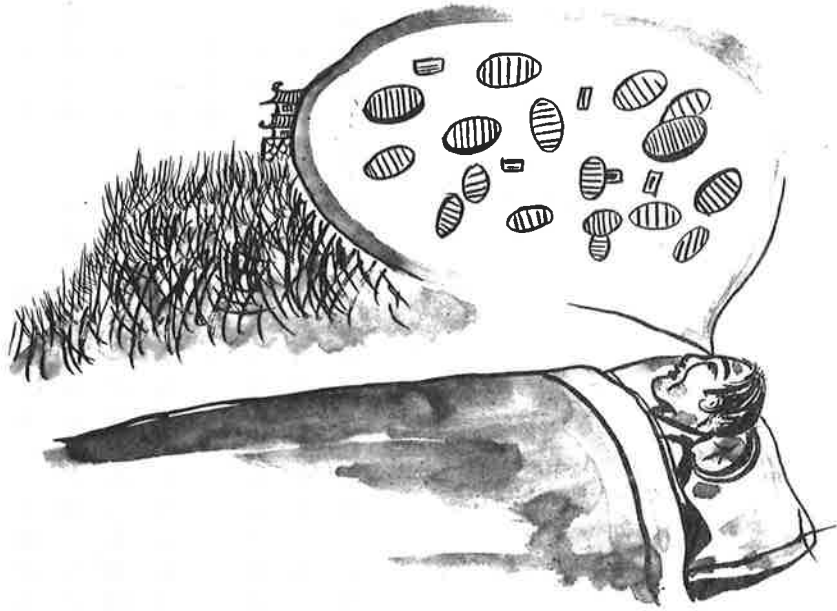
まわりからの水が流れこんで、細い小さな流れを作っていました。

六兵衛さんは一人の白髪はくはうの老婆が一心に、小豆を洗っている姿をみつけました。そしてしばらくじつと息をとめてながめているほかありませんでした。老婆はいつまでたっても同じことをくりかえしています。

やつのことでその場をぬけ出した六兵衛さんはいちもくさんに家の方へ向ってかけだしました。音はいつまでもきこえてくるようでした。

次の日、六兵衛さんはきのうのできごとを皆に話してきかせました。

人々は、「このあたりには妖怪ようかいが住んでいて人々の近よるのを大変きらい、そのようないたずらをしたのだらうと言いつた。」ということでした。



夢の財宝

結城家は初代城主朝光ともみつからかぞえて十八代にわたって栄えました。この間に実り豊かな関東平野の中でかすかすの金銀財宝がたくわえられていきました。ですからお城の土中には金銀財宝がたくさんかくされているというようにわさされるようになりました。

熊倉良助さんは東京に住んでいました。ある晩、ふしぎな夢をみました。枕元に白髪の老人が杖を持って現われ、

「昔、栄えた結城の城下にはたくさんのお宝がかくされている。行ってさがしてみるがよい。」

と言つて姿を消しました。

「そんなばかなことが：：。」

熊倉さんは大して気にもとめませんでした。が、何度か同じような夢を見るようになりました。

「もしや……」熊倉さんもいつの間にかそう思うようになりました。そこで、結城地方の歴史を調べてみました。いろいろと調べていくうちに夢中になっていました。

大正七、八年ごろ、ついに大がかりな発掘作業をして財宝を探し出すことにしました。熊倉さんは胸がわくわくするのをどうしてもおさえることができませんでした。そしてたくさんの人夫が集められました。

しかし、掘っても掘ってもかわらかけばかりで何も出てきません。人夫の数もしいに少なくなり、作業も中止になってしまいました。結局、財宝はみつかりませんでした。現在、聡敏神社の近くにある橋はこの時にかけられたものだと言われています。



きつねと平助

山川新宿部落に平助というまずしい百姓がいました。平助は、沼でとれたさかなを売りに毎日近くの村々にでかけ、少しばかりのお金をえて生活していました。

ある日、平助はいつものようにさかなを天びんほりにさげ、下妻の方まで売りにでかけました。ところが、その日は、ほとんどさかなが売れず、とほうにくれながら帰ってきました。八千代町若の御前山のところまでくると、日はとっぷりとくれています。あまりつかれたので、道ばたに天びんほりをおろし、

「あすのくらしは、どうしたらよいものか。」としあんにくれながら休んでいました。

すると、沼地のがまの穂のかけから、きつねが三びき顔を出しているではないか。

「しめた。このきつねをとらえて皮を売れば高

く売れるぞ。」
と考えた。だが、とらえようとして天びんぼろを持つと、
「もし、ころしてばちがあたつては。」

と考えたりして、なかなかきつねのそばへ近よれませんでした。

しかし、平助は、このきつねをとらえて売らなければあすの生活にこまってしまうのです。おそろしさも忘れ、天びんぼろのえをつかんで一びきのきつねにねらいをさだめ打ちこみました。ほかのきつねは、ものすごい顔つきで平助をにらみつけています。その顔を見た平助が目をつぶす間に、二ひきのきつねはけがをしたきつねの首をくわえ、がまのしげみ深くにげいてしまいました。

せつかくのえものをつとりにがたくやしさと、つかれがたのか、平助はその場にこしをおろしてしまいました。そのまましばらくさんねんそうにしています。が、やっとあきらめ家に帰ってきました。

家についた平助は、天びんぼろとかごを投げ出すようにおろし、台所にこつていたあわのごはんを流しこむように食べました。

食べ終わると、腹いっぱい食べた満腹感まんぷくかんと、とらえられなかつたおしさが加わったのか、どつとつかれがでてきました。うすいふとんを出し、着のみ着のままねこんでしまいました。

深いねむりに入ったま夜中ごろ、

「ドン、ドン」

と戸をたたく音に目をさました。平助はこんなま夜中に何の用があるのだろうかとうふしぎに

思いながら戸をあけました。すると目の前に二人の大きなさむらいが立っているではありませんか。こしをぬかささんばかりにおどろきました。おそろおそろ

「何のご用ですか。」

とたずねますと、二人のさむらいは、

「これから結城へ行きたい。平助あんないしてくれ。」

といいます。平助はとつぜんのあまり、ろくに返事もできずただ頭をさげて、

「へい、へい。」

とばかりいつていました。二人のさむらいはいそぐよりたいので、

「すぐしたくをしてくれ。」

といいます。平助はおそろしかつたが、いそいでしたくをしてあんないすることにしました。まつくらなま夜中なので、道をまちがわないように、まわりをよくたしかめ結城をめざして歩きました。しかし、行けども行けども結城にはたどりつきません。どうしたことが、もとの場所へもどつてきてしまいます。こんなことを何かいもくり返しているうちに二人のさむらいは、

「せつしやは、だいじょうぶだ。お前は帰ってもよい。」

といわれたので、おそろしさからはなされるよろこびで、家に向つて一もくさんにかげだしました。



信州しなの信濃の民話にこんな話があります。
 「むかしむかし信州に、でーたら坊のでーらん坊という大男が住んでいました。信州には山が多いので、村人たちは、耕地ちちのことでいつも争いをしていました。それを見ていたでーらん坊は、『耕地があまりにも少な過ぎるから争いが絶えねんだべえ。ひとつ、おれが平らな土地でも作ってやつか。』と行って、塩尻しじり平や小海こみ平をつくりました。

力仕事をしたでーたら坊のでーらん坊は妙まぎ義山ぎさんを枕ひるねにして昼寝をしていました。すると、一匹のいのししが出てきてでーらん坊の足をかじりました。でーらん坊は目を醒さまして、そのいのししをつかまえました。『こいつ、どうしてくれよう。そうだ。お腹がペコペコだ。いのしし汁を作って食べることにするか。』ーおな

足跡(あしっこ)の話

べにしおやみそを入れて、ごとごと煮はじめました。そして、食べようとおなべを運んでいるうち、つまずいて、おなべを塩尻しじり峠にぶちまけてしまいました。そのため、塩尻峠の近くからは、今でも塩がとれるという事です。そして、その近くの山々は、大きくなるう、高くなるうとしても、こぼした汁が重くて、大きくなれないんだそうです。」

これと同じような大男の話は、結城にもあります。結城に伝わる大男は、大タロ坊だい・たろ・ぼう(一説にはだたいち坊)と言いました。信州しんしゅうのでーたら坊のでーらん坊のように、この広い関東平野で、お百姓ひやくしやうのために畑を作ったり、田んぼを作ったりして働いていたのです。仕事で着物がよごれてしまったので、筑波山に腰をおろし、鬼怒川で洗濯せんたくをしていました。そのとき、大きな足跡が二つ田んぼの中に残ってしまいました。小埜の乗国寺のりくにじの前の田んぼはその大男の左足跡で、前田まえだといい、乗国寺のりくにじの北の田んぼは右の足跡で、後田ごたといいます。大タロ坊は、その足を鬼怒川で洗ってから、うーんと背伸びをしました。したら、また一つ足跡がつかまりました。それは、今の下り松の田んぼで、建田たけだ神社の近くにあった足跡(あしっこ)沼で、大きな足跡の形をしています。

あしっこ沼は大正十年ごろ、大勢の村人たちが出て埋め立て、今では立派な田んぼになっています。

娘は、毎日、毎日なきながらすごしておりましたが、悲しみのあまり、その池に身を投げてしまいました。
その後、この池は、濁ってしまい、酒をつくることができなくなりました。そのため、さむらいの家は、次第におちぶれていってしまったということです。



長者が池

むかし、この城の内に、力の強いさむらいが住んでいました。
屋敷内も広く、多くの人を使って酒をつくらせていました。
庭には、すんだ清らかな池があり、その水を使って、酒をつくっていました。この池の水がよくて、よい酒ができるのでさむらいの家は、代々栄えていました。
この家に人もうらやむほどの、朝日姫というたいそう美しい娘がいました。
この娘がある時、村の若者に恋をしました。
この若者は、はたらきもので、心のやさしい人でしたので、たいへんすきになり、かくれて二人はあっていました。身分に差があり、ついに二人は別れ別れになってしまいました。

お産山

お産山



東茂呂のはずれを小川が流れ、どてづたいにしばらく歩くと、人里はなれたところに林があります。おもに杉やひのきの大木がうつそうとして昼もうす暗く、中を通る一本道はほとんど人をよせつけませんでした。まれに山しごとや野良しごとを終えた人が村に帰る近道として利用するだけでした。

林をぬけると一本杉があり、そばの花が畑一面を白くして若者が仕事に区切りをつけた時には、陽はとつぷりとくれています。むらさき色にそまつた西の空をあおいで若者はあわてました。昼でも気味わるい林道を通らなければなりません。若者はかさこそとなるおち葉の音や風が鳴らす木々のゆさぶりをうちけすように鼻歌をうたいながら道をいそぎました。

ちようど林の半分ぐらい来た時です。ふと、

だれかの声が聞こえたような気がして若者は立ちどまりました。耳をすますとたしかにふしぎな声が近づいてきます。

「オギャー、だいとくれ、オギャー、だいとくれ。」

赤ん坊の泣き声と、母親らしい女のだいてほしいというあわれなねがいのように聞こえます。ふり返っても人の気はいもなくきみわるくなつた若者は、走って家に帰りました。

それから何日かして、村人たちの中にも「オギャー、だいとくれ。」

という声を林の中で聞いたという者が何人も出てきて、うわさは村中にひろがりました。

若者は、おばあさんに話すと、

「何かのたたりだ。」

といったが、いつの間にかゆるいが出るということで、この林に近づく者はひとりとしていなくなりました。

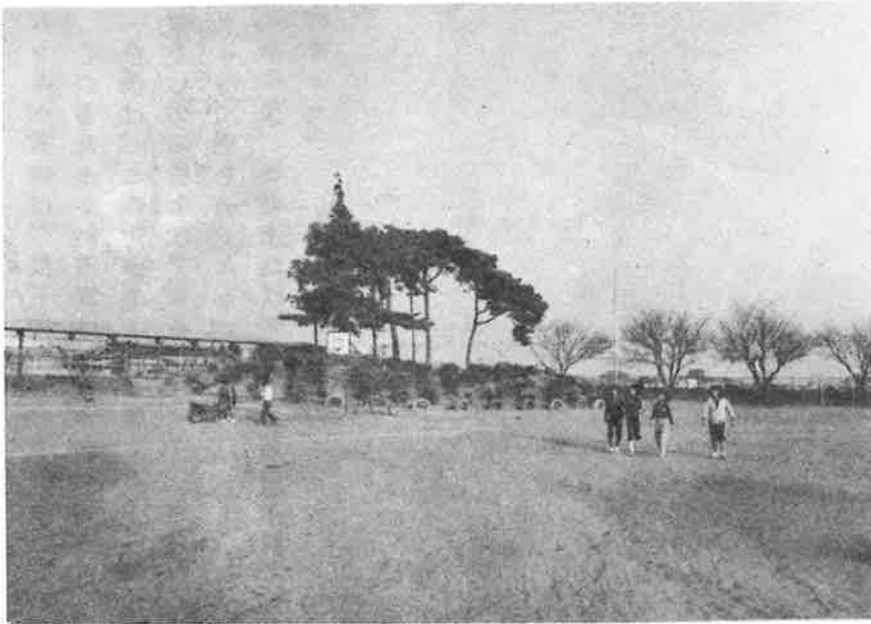
「いったいだれが、なぜ：：。」

若者はもう一度その林に行ってみることにしました。

林道の中ほどまで行くと、やはりこの前と同じように、

「オギャー、だいとくれ。」

という声が聞こえてきます。今度こそその声をつきとめようと、声のする方に歩いて行くがどこまで行っても追いつけません。林もつきるころ目の前が急に明るくなり、若く美しいむすめが、かみをふりみだして立っているではありませんか。白しようにぞくにわらじばきのすがたは、



城南小学校のかたすみに、「天神塚」という前方後円墳が残っている。だれをほおむった墓なのか、遠い昔のことかわからないが、この辺一帯は、古墳群があつたといわれている。平らな土地に埋棺した古墳は塚になり、おお昔はそのあたりが繁昌したといわれる。そのことから繁昌塚という名が生まれたのだらう。しかし、一方では次のようなことが言い伝えられている。

今から約三七五年前の、結城中納言秀康が、天下分けめといわれた関ヶ原のいくさのてがらで、越前福井に領地をうつされることになった。いよいよ出発のおり、馬の上から東の方をみると、貧しげな農家があちらに一軒こちらに一軒と、いかにもあれたようなようすであつた。こ

繁昌塚という名の起り

どうみてもこの世の人ではなさそうです。とつぜんのことにおどろいてにげ帰る若者の背にまたしても、

「オギヤ、だいとくれ。」という声が追いかけて来ます。家に帰った若者は、その日のことをおじいさんに話しました。するとおじいさんは、こんな話をしてくれました。

「むかし、この村に赤んぼをだいた若いむすめがやってきた。そりやあ美人でな。だがまずしい身なりをしたこじきじゃつたよ。わたしはいいが、赤んぼに何かめぐんでほしいと泣いていたつ。だけどな、そのころはこの村もまずしい者ばかりで、はらをすかして泣く赤んぼにさえ何もあげられなかつたわい、みんなよつてたかつてむすめを追いかえしてしまつた。」

その後のむすめのことにはだれに聞いても知る人はいませんでした。しかし、若者は思いました。その赤子をだいた娘が林の中ほどで倒れ、あの時何もしてあげなかつた村人たちをうらんでいるにちがいないと。

若者は、さつそく村人たちを集めてこの話をしました。みんなで相談して、くようをすることにしました。一本杉の下に小さなつかをつくり、黒みかげ石に「童子大姉の墓」ときざんで立て朝を夕なに線こう、花をたむけるようにしました。それからというものは、

「オギヤ、だいとくれ。」

という声は聞こえなくなり、娘を見ることもなくなりました。林はいつしかだれいともなく「お産山」とよばれるようになり、村人はここにお参りすると、お産がかかるくてすむといつて行くようになりました。

れをみた秀康は、部下に何という部落かを尋ねると、名もない部落である、という返事だった。心のあたたかい秀康は、とつさに、「今後は、この地がますます栄えるように繁昌塚と名付けよう。そしてこれが結城へのおもいでとしての置土産である。」
 といって立ち去ったという。
 その後、この土地は栄え、土地の人は、だれいうとなく、いつの間にか、繁昌塚というようになつた。

ゴリヨウ山

山川地区大字粕礼に、ゴリヨウ山、ゴロー山といわれているところがある。
 げんざいの粕礼公民館から県道にそつて四百メートルぐらい北の地である。今ではこり地せいり、県道のつけかえなどでけずりとられ、山のようにはなつていないが、四十年ほど前は、高さ三メートルぐらいのりつばなまる塚であつたといわれている。

この部落については、まる塚の古ふんがたくさんあつたそうである。まる塚の古ふんからは、あかくさびたかたな、はにわ、つぼ、まが玉などがはつくつされ、その一部は、今でもほぞんされている。

ゴリヨウ山からは、石棺(石のかん)などもほりだされ、その石は、用水ほりをわたる橋などに長い間つかわれていたともいわれているが、こり地せいり後どうなつてしまつたのかわからない。したがつて、ゴリヨウ山はお墓のあとではないかと、土地の人はいつている。

また、ここには、御霊社があつて、六十年ぐらい前、粕礼の西方にある現在の鷲神社に合社されたともいわれている。

ところで、ゴリヨウ山という地名であるが、なぜ、このような地名がつけられたのか明らかではないが、「御領」「御料」「御陵」などのことばがなまつて「ゴリヨウ」「ゴロー」山の地名がつけられたのではないかと言われている。

その中でも、いろいろな出土品などから、「御陵」がなまつて、ゴリヨウ山といわれるよう



HK

みなさんは、「會我物語」を読んだことがあ
りますか。伊豆に勢力のある伊東祐親という大
名がおりました。源頼朝が伊豆に流されたとき、
頼朝をあずかったのが祐親です。祐親の一族の
工藤祐経は、領地のことで祐親を暗殺しようと
考えていました。しかし警戒が厳重で果たせま
せん。たまたま、祐親は頼朝をなぐさめようと
狩りに出掛けましたが、その帰り、祐経の手下
の待ち伏せに会い、祐親の子、河津三郎祐泰は
腹を射抜かれ、なくなってしまうました。祐親
は危うく難は逃れましたが、祐泰にはその時五

會我殿台

結城城主朝光公は、工藤祐経の孫娘を奥方と
して迎えました。ところがそれ以来、朝光公の
枕元に、毎夜毎夜亡霊が現われるようになりま
した。その亡霊は、祐経に恨みを抱く會我兄弟
の亡霊でありました。



になつたのではないかという説が、もつとも有
力なようである。
その「御陵」であるが、大むかし、東国ちん
ていの神々の武將がこの地をおさめ、死んだの
ち、村びとが、その人の徳をしたつて、御陵を
つくつたものではないかといわれている。

才と三才の子供がおりました。兄を一万いちまん（後の十郎祐成すけなり）、弟を箱王はこおう（後の五郎時致ときむね）といい、兄弟は、工藤祐経ゆうけいを父の仇かたきとねらい、十八年の辛苦しんくの末、頼朝もよおが催した富士のすそ野の巻まきき狩りの夜にめでたく仇討あだちの本懐ほんかいを遂とげ、そして十郎は討ち死にし、五郎はとらえられて首を切られました。

その會我兄弟の亡霊が、夜な夜な朝光の枕辺に現われるのは、仇の祐経すけつねの孫を奥方にしたからに相違ない。しかし、仇討かたきちも立派に果たしたことはあるし、もともと伊東祐親すけちかと工藤祐経ゆうけいはいと同志、同じ一族の間から、この世でたとい骨肉相争こつにくあいあらそうとも、あの世では同じ蓮はぢすの上にいようものを。成仏じやぶつできずにいるにちがいない。南無阿弥陀仏なむあみだぶつ。――

朝光は彼等の霊をなぐさめるために、石のほこらを建て、ねんごろにとむらつてやりました。それ以来、兄弟の亡霊は出なくなりしました。そのほこらのあつたあたり、今は會我殿台そがどのたいと呼ばれています。

わらでつぼうをうちながら

うたう歌 (1)

十五夜 (十三夜) お月

てつぼうぶつて、あげましよう

大麦あたれ

小麦あたれ

三角畑のそばあたれ

ほら、もぐらもつな

十五夜 (十三夜) お月

てつぼうぶつて、あげましよう

大麦あたれ

小麦あたれ

三角畑のそばあたれ

ほら、もぐらもつな

大麦あたれ

小麦あたれ

三角畑に、そばあたれ
そら、もぐらもち

ひとつ

ふたつ

おまけに

みつつ

わらでつぼう

わらをぼうのように細いなわ
でしぱり、かたくしたもの。
わらのなかにいもがらを入れ
る。

わらでっぼうをうちながらうたう歌

わらでっぼうをうちながら

うたう歌(2)

十三夜(十五夜) お月さん
てっぼうぶって、あげましょり

大麦あたれ

小麦あたれ

三角畑に、そばあたれ

そら、もぐらもち

ひとつ

ふたつ

おまけに

みつつ

十三夜(十五夜) お月さん

てっぼうぶって、あげましょり

地域や性別により、歌詞に多少のちがいが
ある。

十五夜るときは十五夜と、十三夜るときは十

三夜と、二度うたう。

。子どもが泣いて、親の言うことをきかない
ときに、うたつて聞かせた歌

でれすけでんべい

ごへい

あしたおきたら

すをつくれ

親の言うことをきかないで、いつまでも泣
いていると、鳥のすにはこばれて、たべられ
てしまうぞという意味。

てまりうた



てまりうた

学校から かえると、みんなが ひろば 広場にあつ
まつて まりつきをしました。ただ、まりをつ
いているのではなく、てまりうたに あわせて
まりつきをしました。だれが いちばん 長く
つづくか きょうそうしました。ですから だ
れかが まりつきを はじめると、だれいうと
なく てまりうたを 歌いはじめるのです。

一に たちばな

二に かきつばた

三に さがりふじ

四に ししほたん

五つ いやまのさんやのつつじ

六つ むらさき いろよくそめて

七つ なんてんば

八つ さいばり

九つ こむぎ



よしおちゃんは、今夜のくるのがたのしみでした。夕ごはんをはやめに食べおわると、おじいさんが作ってくれた「わらでつぼり」を持って、かっちゃんの家へでかけました。かっちゃんには小学六年生、よしおちゃんは五年生です。そのほか、近所の三・四年生と全部で六人してわらでつぼりうちに行くことを、やくそくしていたのです。よしおちゃんが、かっちゃんへいつてももなく、全員がわらでつぼりを持って集まりました。かっちゃんがいいました。

「さあ、でかけよう。はじめは東の家だ。」

東の家というのは、田村さんという大きな農家です。あたりはすっかり暗くなり、東の空には、大きなまんまるい十五夜の月が浮かんでいきます。草むらではこおろぎがさかんに鳴いていました。

十五夜

十で とのさま ばんばんさい。
ひとつのてまりうただけでなく、ほかのグループでは、別のてまりうたを歌いながら、まりつきをしています。

- 一ばん はじめは 一の宮
- 二また 日光中禅寺
- 三また 佐倉宗五郎
- 四また しなの善光寺
- 五つは 出雲の大やしろ
- 六つは 村々 ちんじゅさま
- 七つは 成田の お不動さん
- 八つは 八幡の はちまん宮
- 九つ 弘法大師さま
- 十で 東京の本願寺

ゴムまりをつき、歌にあわせて、まりつきを はじめたのは、明治の世の中ごろからです。ですから、おばあさんやおかあさんに たずねると もつともつと てまりうたを きくことができますね。そして どんなてまりうたがあるか 調べてみると いいですね。



消えたたくわえ

結城市の北東から南へ田川が、曲りくねって、ゆつたりと流れています。

むかし、この川のほとりに、田河内という、小さな部落がありました。このあたりは、地味ちみの豊かなところで、田んぼには、こがねに色づきはじめた稲が、いかにも重そうに、頭をたれながら、ゆらゆらと風にゆれています。

東の方には、青い空の下に、筑波山が、三角定木のように、くつきりとそびえて見えます。

「ことしは、豊作になりそうだな。」

「洪水でもこなけりや、このぶんだと大豊作だ。」
道を行く人々の声も、明るくはずんでいます。
遠くの方から、すずめの鳴く声が、チュン、チュンと聞こえてくる、のどかな日和ひよりの日でした。

田河内の部落に続く、曲りくねったあぜ道を、

くわ畑はたけをすぎると東の家です。東の家の門を入ると、えんがわに机つくえがでていて、その上にはおだんごとおさつまがかざられてあり、花びんには、すすき、実みのなつた柿かきとくりのえだなどがいけられてありました。

かつちゃんが大ききな声で、「うたせとこれー。」という、家のおくから、おじいさんがでてきて「はいよ。元気な声でうってくれよ。」とにこにこしながらえんがわに立って声をかけてくれました。よしおちゃんたちは、庭に半円はんえんをえがくように腰こしをかがめて、わらでつぼりをうちながら、大きな声でうたいました。

「おおむぎあたれ こーむぎあたれ

三角さんかくばたけのそばあたれ

ねんじん ごぼりも みなよくあたれ

だいずも しょうずも みなよくあたれ

おまけの おまけの もひとつおまけ：：」

おじいさんは、目をほそめていいました。「うん、ことしのさくもつは、みんなよくとれそうだ。おだちゃんをはずむから、もう一どやうてくれ。」

よしおちゃんたちは、うれしくなつて、もう一度うたいながら、わらでつぼりをうちました。

「おおむぎあたれ こーむぎあたれ：：」

その声は、たんぼのむこうの、線路せんろのぼりまでながれていきました。空のお月さんも、ますますひかりを増ましながら、にこにこ子どもたちを見まもっているようでした。

背に大きな荷物をせおい、竹のつえをつきながら、ひとりの年老いたこじきが、とぼとぼと歩いていました。

このへんでは、だれもみかけたことのないこじきでした。

こじきは、いかにもつかれたように、ときどき立ち止まっては、大きなため息をついていました。

田河内の部落に入ると、こじきは、いけがきにかこまれた、ゆうふくそいな農家ののき先に立って、

「なにかめぐんでください。」

「なにかめぐんでください。」

と、つぶやくような声でいいました。

近づいてきたその家の主人は、

「わたしの家には、他人にあげるようなものは、なにもないよ。」

と、いかにもめんどうくさそうにいつて、奥に入っつてしまいました。

こじきが、立去るのを見とどけた主人は、土間で洗濯をしていたおばあさんに、

「おばあさん、きょうもこじきがきたよ。きょうは、お金をえんの下の箱の中に入れておきなさい。」

と、いいました。

「はいよ。おじいさん。きょうはお金にするのですね。」

おじいさんとおばあさんは、こじきがくるたびに、こじきにめぐんであげたつもりで、その

分を箱の中にしてしまつて、たくわえをふやそうとしていました。

こじきは、部落の中の路地をぬけると、つえを持ちなおしながら、とぼとぼと田川の方に歩いていきました。

田川の川岸までくると、こじきの姿は見えなくなってしまいました。

それからしばらくたつたある日。

おじいさんは、もうだいぶたまつただろうと、えんの下の木箱を取り出し、開けて見ました。するとどうでしょう。木箱の中には、お金やお米はひとつもありません。

お金やお米のかわりに、白いへびが一びき、頭をもちあげ、赤い舌をチヨロチヨロと出しながら、いるではありませんか。

おじいさんは、こしをぬかさんばかりにおどろきました。

白いへびは、木箱からぬけだすと、くるくるとからだをくねらせながら、田川の方に、走りだしました。

田川に入ると、上流に向つて、するする泳ぎだしました。

きゆうに、今まで雲ひとつなく晴れわたつていた空に、もくもくと黒い雲がわき起こり、お日さまをかくしてしまいました。

風がごうごうと、田川の土手にしげるささやぶを、大きくゆすりはじめました。うすぐらくなつた大地に、いく本ものいなづまが走り、こまくがやぶれんばかりに、かみなりが、ガラガラ、ガラガラガラと鳴りひびきました。

とつぜん、田川の水がうずをまき、ザザザザザザというものすごい音とともに、天に向
つて登りだしました。

龍巻たづまきが起こったのです。

それから大雨が降りました。

大雨は、いく日もいく日も降り続き、田川や近くを流れる鬼怒川の静かな流れを、濁流だくりゅうに変
えました。

濁流は、田川や鬼怒川の土手を破壊はかいし、大洪水をひきおこしました。

土手を打ち破って流れ出した濁流は、田河内の部落の人々の家や田畑をおし流してしまいま
した。

人々は、これは、

「雷神様らいじんのたたりだ。」

と聞いて、恐れ、ここに雷神様をまつりました。

雷神様のおやしると田河内という部落は、今はここに残っていませんが、雷神宮らいじんぐうという地名
は、今でも残っています。



上山川「我里内」がりうち

部落の名のおこり

結城市立上山川小学校のあるあたりから、北
の方の部落の名は、いつごろ、どのようにして
つけられたものでしょうか。

今から、およそ七百年前のむかしに（一二四
二年）に、結城七郎朝光ともゆきという人がいました。
この朝光の三番目の子を、山川五郎左衛門とい
います。この五郎左衛門は、大きくなつてから
おとうさんの朝光から、広い土地を、ゆずりう
けました。そして、山川の庄しやう（土地）の地頭
（その土地をおさめる人）となりました。

山川五郎左衛門は、若党わかどう（年の若いけらい）
や下人げたん（めしつかい）など、大ぜいのけらいに
田や畑をあたえて、たがやさせました。また、と
きには、武器ぶきをもつて、たたかひにでかけまし
た。

けらいの人たちは、ふだんは、田や畑をたがやしてはいますが、「いざたたかひ。」となつたときは、武器をもつて、主人、山川五郎左衛門の家をまもるといふしくみをつくつてあんしんしてくらせるようにしたのである。そのとき、山川五郎左衛門は、けらいや村の人々に「わたしは（我）この地で（内）身を立てるのである。」といひました。このことはがもとになつて「我立内」と呼ぶようになったと、つたえられています。

享保（およそ二百五十年前）の年につくられた念仏鐘（念仏をとらえるときに、たたくかね）には、

「享保九歳辰六月吉日 三十五人 下総国結城郡山川村我立内」と、しるされています。

今のように「我里内」と書くようになったのは、いつごろからなのか、わかりません。



若 御 前

山川地区の芳賀崎の南端、粕礼にせつするところに「若御前」という地名がある。

昔、平将門のちよう愛を受けた和歌御前は沼田庄（今の群馬県沼田市）に生まれ、近在（きんざい）な美しい女人といわれ、教養も高く、和歌にもすぐれており、山川綾戸城にすんでいたといわれる。

山川綾戸城は、天けい三年二月（西暦九四〇年）藤原秀郷、平貞盛の軍勢にせめ落されたが、そのとき、和歌御前は、大雨と大風の中を城からぬけ出し、芳賀崎地内まで、やつとの思いでにげのびたどりついたが、からだは傷つき、身も心もつかれはて、ついにたおれてしまった。

ゆきだおれていた和歌御前は、村人たちにたすけられ、村の人たちの手あつかいほろをうけたが、そのかゝいもなく、とうとう死んでしま

った。

村人たちは、女の人の死をあわれみ、その地（芳賀崎）に、ほろむつてあげたそうである。その後、村人たちの手によってまいそうされたその女の人は、毎ばんのように、村人たちのゆめまくらに立ちあらわれたそうである。

ふしぎな気味の悪いおもいをした村人たちは、その女の人のなきがらに、ねんぶつをとええ、小さな石塔を立てて、ねんごろにくよりしたと伝えられている。

それから、その地を若御前という地名で呼ばれるようになったといわれている。

今では、こう地せいりされ、形はのこしていないが、若御前の地名は残され、今でも、その土地は、人々から「若御前」と呼ばれている。

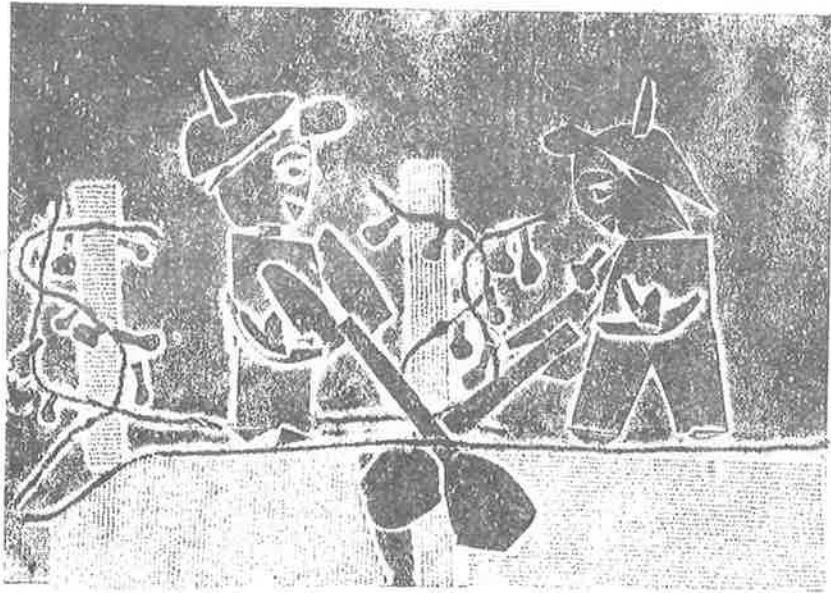
「曾雌」の話

「曾雌」の話

七世紀のはじめ、聖徳太子は、小野妹子を隋の国につかわされました。当時、中国の隋はたいそう文化の進んだ国でした。そのことから、何回も遣隋使が派遣され、中国のすぐれた文化が日本にも渡って来るようになりました。また、朝鮮からも多くの学者や職人が日本に招かれて来るようになりました。その中に、曾という機織の技術のすぐれた人たちがおりました。天皇は、たいへんその人たちをおかわいがりになって、帰化（外国人が日本人になること）することを勧められました。そして、それらの人たちの頭領は女の人でしたので、帰化する時の名を曾雌と改められました。天皇はますますそれらの人たちをかわいがられ、またそれらの人たちも、一生けんめいに機織は、いままでに見たこともないようなすぐれた織物を作っては天皇に献上しました。ところが、天皇があまりそれらの人々をかわいがられるものですから、まわりの人々はおもしろくありません。天皇に、あること、ないこといろいろなつげ口をしてついに曾雌の一族は都にいられなくなり、他国に逃げなければならなくなりました。

曾雌の一族は、お互いに助け合い、はげまし合いながら、東へ、東へとのがれ、東国の山梨まで逃げてきました。知らぬ他国で、しかも追われる身、どんなに苦労したことでしょう。病人は出るし、疲れ果てて、一部の人たちは、山梨に住みつくことになりました。しかし、機織りで生活する以外に、その人たちの生きる道はありません。彼らは、山梨で機織りをはじめました。それが今日甲斐絹といつて、織物の伝統が残っているのです。

しかし、山梨に定着することを不安に思った人々は、なおも東に逃げて関東平野に入り、結城のあたりまで来ました。広々としていて、どこか故郷を思わせるような景色です。人々はほつとしました。彼等は、そこに定住することにしました。はるかに筑波山を望み、鬼怒の流れの音を聞きながら、桑を植え、蚕を飼いました。そして機織りをしたのです。機を織る「おさ」の音は、静かな平野に、さえて響き渡りました。それ以来、結城には、結城紬が織られるようになったのです。このようなことで、織物業の盛んなところには「會雌」という姓が多いのだということです。



長者の跡の芋畑

鬼怒川が、まだ林地内の「捨て掘」のあたりを流れていた頃の話です。

鬼怒川の近くには、名主様の持つている大きな舟場がありました。大勢の男たちが、名主様の広い広い杉林から、ひとかかえほどもある太い杉を切り倒しては舟場にはこび、そこで舟を造っていたのでした。その場所は今でも「舟屋敷」と呼ばれています。

やがて舟ができあがると、名主様は、それに、米やさつま芋などを、どっさり積んで、江戸へこぎ出していました。

その大それた勢いの名主様の家もいろいろな事件があつて、屋敷を人手に渡し、他の土地へ引越してしまいました。

それから、何年も何十年も過ぎました。

鬼怒川の流れはすっかり変わり、舟場もいらな

くくなりました。大きな杉林のあとも、広い屋敷のあとも皆畑になって、他の人が作っていました。

ある年、その畑に山芋を作りました。つるは太太ふとふととしてからみ合い、葉はつやつやと輝かがやいていました。

「どんなにか太い芋が掘れるだろう。」

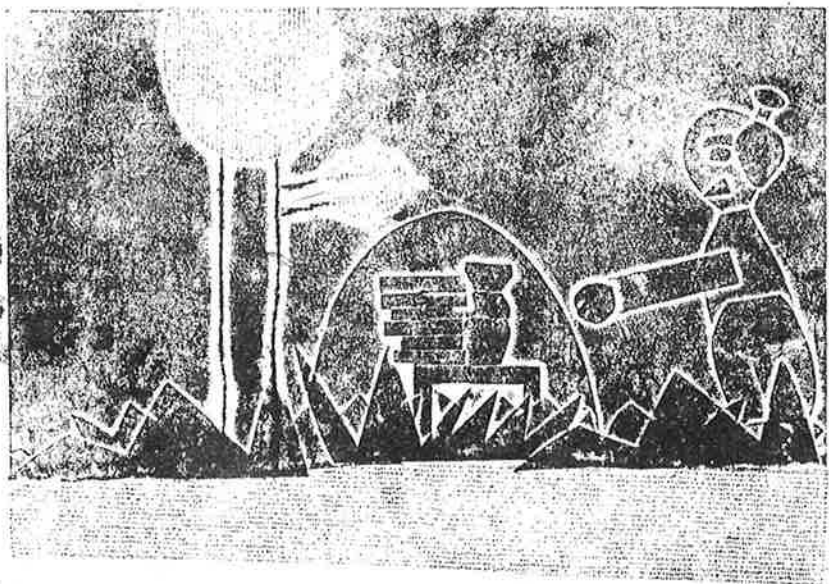
持ち主は楽しみにして芋を掘りにかかりました。

「よいしょ。よいしょ。」

どンドン掘りました。太い太い山芋は、掘っても掘っても抜けません。きつとやわらかい土地なので、どンドン根が張り、どンドン育ってしまったのでしょう。持ち主は「困ったな。」と思いつつ、根気強く掘っていると、「カチン。」と音がして、くわの先が何か固いものに当たりました。「はて、こんなやわらかい畑なのに。」持ち主は、近所の人の手を借りて、まわりをザクザク掘りました。大きな穴の底に石の棺があらわれました。小さな玉石を積み、粘土で固めた棺でした。平たい石を五枚並べただけのふたを取ると、中には、大刀と小刀が入っていました。ひどくさびていましたが、とても立派な刀でした。

村の人は、その他はいつていたものといっしょに、だいに取り出して、東京の博物館へ収めました。

考古学者の話では、今から一三〇〇年ぐらい前のものだという事です。



ほら穴様

林の西の方に、大きなほら穴がありました。あたりには、草がほらほらと生えた淋しいところでした。だれも近寄る人はありませんでした。

でもお葬式おむしや結婚式などのように、人寄せごとができる、村の男たちは、ほら穴の前にやつてくるのでした。そして、まつ暗いほら穴の口をのぞくようにして、

「あしたは、村に人寄せごとがある。ぜんや、わんを三十人分かしてくれ。」

というのです。中はしんとしずまりかえつていて、物音ひとつしません。人のいるような気配は全くありません。

このほら穴へくる使いは男たちにきまっていた。女達には、気味悪くてとても近寄れなかつたのでした。

その男たちも、たのみごとが終わると、こわ



旧結城寺の由来

このお話は、今からおよそ一三〇〇年も昔のお話です。

その頃、大雨などで川の水があふれ、まわりの田や畑一面をおおってしまった、水びたしになつてしまふことがたびたびありました。

すると、人々は、みんな川の中に悪い龍りゆうがいてあばれるのだと考えていたのです。

鬼怒川きぬがわのへりにあつた山川のべたの部落野畑のべた（現在の上山川地方）でも、毎年、大雨などで水があふれると鬼怒川きぬがわをながめては、この川にも悪い龍が住みついてにちがいないと考えるようになりました。

川の水があふれると村人たちの苦しみよりといつたら、悪い病気がはやり大切な作物は流されるわで、それこそ大変なものだったので。野畑という土地の名も実は毎年くりかえされ

ほら穴様

どわ穴の前を離れ、あとは絶対にふり向かず、一目散に帰ってくるのでした。翌朝、村の男たちが、ほら穴へ出かけて行くと、ほら穴の前には、頼んだとおりの膳、わんがきちんと積んでありました。金の家紋のついた黒ぬりの立派な膳わんです。こうして、村では何かあると、ほら穴様にたのんでは膳わんをかりてちょうほうしていましたが、だんだん返し方がずほらになり、よくきよめないまま返したり、借りただけの数を返さなかつたりするようになりました。そして、ほら穴様は、いくら頼んでも、もう膳もわんも貸してはくれなくなつたといふことです。

どんな人が住んでいたのでしょうか。だれも見ることがありません。どんなくらしをしていたのでしょうか。だれも知ることができませんでした。いつ頃どこから来たのでしょうか。どこかへ行つてしまつたのでしょうか。だれも知ることができないまま、穴の入口は、ほうほうと草くさに覆われ、村の男たちが、ふみつけて作つた細い道も丈の高い草でかくされてしまひました。

る。この水によつて畑が野はらのようになってしまふところからつけられたものなのです。そんなある日、ひとりの老人が出て来ていうには、今、野州（いまの栃木県）には、大変偉いおぼろさんがいて、薬師寺というお寺を建て関東地方の人々によいおこないを教えています。このおぼろさんならきつと鬼怒川の悪い龍もしずめてくれるにちがいない。「わたしが行つてお願いしてみよう。」

村人たちは、喜んでさつそくこの老人にお願いして、そのおぼろさんをつれてきてもらうことにしました。このおぼろさんこそ、実は、奈良の唐招提寺というりつばなお寺を建てた鑑真という有名なおぼろさんの第一の弟子といわれる祚蓮律師というおぼろさんだったので、祚蓮は野畑にやつてくると、堤防の上に、祭壇を作り一心にお祈りしました。

ところが、どうでしょう。お祈りがきいたのかどうか、その後、鬼怒川の水は、あふれることもなくなり、村人たちが苦しめることはなくなつたといふのです。

村人たちは、それはそれは、喜んで祚蓮さんのために小さなお堂を建ててお祭りしました。

このお堂が鎌倉という時代になつて、日本の三戒壇（おぼろさんの学校）の一つにかぞえられた旧結城寺といわれている大金釧宝寺というお寺のはじまりなのです。いちじは、二千人もおぼろさんが、出入りしていた



といわれるこのお寺も、室町の時代の嘉吉元年（一四四一年）の結城合戦という戦いで焼きはらわれてしまいました。今でも、このふきんの畑から、その時代のとても厚い布目の瓦のかけらが見つかり、その頃のことを考えさせてくれます。